

火のいたずら

泉鏡花作

—

「姐さん　—　水を一杯。」

「はい。」

「井戸から汲みたてを、　何うぞ。」

「あちらのお客様がお水とおつしやいます

わ。．．．．．さ、放して。さ、何うぞ．．．．．

ね阿闍梨様。」

—　此の酒屋の若い妻か、一寸年増の娘か、よ
くはまだ分らない。癖のない、艶のいゝ髪を櫛巻に
結つて居る。眦に張を持つほど、ぐツと引詰めて居
るから、年紀も二十二三か、尚二つ三つはふけて見
えよう。撫肩で姿のいゝのが、紺の羽織に、おなじ
やうな着ものゝ襟を深く慎ましく、青がちの腹合の
帯も、格子柄の前垂も所帯染みて、何となく竄れた
が、下ぶくれで色の白いのに、淺葱の半襟に人がら
の柔順な優しさ。客商賣ゆる襦袢の袖は垢のつかな
い小清淨したのを嗜んで、唐縮緬だらうけれど、水

紅色地に、櫻の花片のちら／＼と白く亂れたのが、
手くびにこぼれて、薄紅梅に雪の散りかゝる風情に
見える、雪國の美しい女である。――「放して
――と此の女が言ふ、手首を取つて、しなだれ
て、殆ど不精髯の頬摺りをしさうな、硬ばつた胡麻
鹽の禿總髪、大面の鉢割額で、小鼻の皺が深く、頬
邊がでつぷりとして、ふやけた鼻柱の眞中に、むか
ごほどの疣が一つぶら下つた、皺だらけだが、頬骨
の張つた、六十あまりの親仁を、「阿闍梨様。」
――妙な呼び方をすると思ふと………そま
つな卓子に乗せて置く弓張提灯に、九耀の星を黒く、
片面、一方に、世に言ふ天狗の羽團扇が朱で描いて
ある。見たまゝに受取ると、これは天狗宗の阿闍梨
どの。――勿論、蠟燭は消して居る。

薄汚れた被布づくりの鼠色の半合羽、白襟のきは
づいて垢だらけなのを三つも襲ねて、矢張り鼠色の
無地の布子に、又おなじ色のまちなない袴を裾長に
穿いて居る。だけで、總身に疣があるでもないが、
女に吸着いて離れない。

あとで知れた。――玄性院といふ、掘ると蠣の
出さうな崖下の日蔭の社の堂守で、狗寶信仰の土
地がら、山の魔神のもりをする……。ト筮、禁
厭などを業として、人によると、飯綱を使ふなど、
恐をなす、岩膜と稱する半俗だが、行者とも道人と
も言ふべきを、「阿闍梨様と呼んで貰はうの。」
のぞみなんださうである。

時に「水を一杯」特に「井戸
 から、」と言つて、一方の椅子から聲を掛けた若
 い男は、大島だか擬だか、かすりをかさねて莫蔭を
 着て菅笠を被つて居た。「此の形は、いまこそ
 見えないが、十年ばかりも前までは、農家、漁村の
 人の、雨に雪に城下へ出る時ばかりでなく、町の學
 生が好んで使つたものである。「勿論、脱いで
 居る、が、笠には、まだ雪が残つた。」

この男が、酒店へ入つたのは、阿闍梨親仁よりは
 少時先だつたのである。が、早く雪を消すほどの暖
 を取る設備もなし、酒もまだ寒さを凌ぐほどには廻
 らない。

戸外は、さつ／＼、さつ／＼と雪が降りしきる、
 そして節分の夜なのである。

ー 處で、場末ではないが、一棟、神社のある
 裏町に、電燈も餘り明るくない、この酒店は、小體
 にしろ、何にしろ、當節のバーでもなし、例の居酒

屋で一ぜんめし、あり合お肴と言ふ趣があるので
なかつた。筆者は、實地はもとより、道中の繪で見
ても、話で聞いても、軒に鮫の脚の一まきまいて掛
かつた景色はすきである。酢にしてキユツと嚙みな
がら一升熱い處・・・と來ると場が引立つ。――
この話をお取次するのにも、はじめ聞いて、寒い
國の雪の中の酒屋だと言ふから、湯氣の立つ紫の疣々
へちら／＼と雪のかゝる處か、・・・中へ出る
人物が中毒らうと中毒るまいと、そんな事は構はな
い・・・河豚鍋を掛けさせよう。せめて鮫鰯鍋
でもと意氣組んだが、然う言ふお詠へには行かない
のである。

雑と言へば、酒の取次をする荒物屋で、近頃ほん
の出來心で、土間の板敷を拂つて、眞似ごと同様に、
一二脚、腰掛椅子を置いたばかりであるから。――
「入らつしやい。――」など言ふ景氣も更
にない。別嬪の姐さんが居て、酒屋の癖に何うも陰
氣で。

第一菅笠の男が門口へ立つた時は、まだ宵の口だ

と言ふのに、――新屋とかいた二枚の腰障子も、
ぴつたりと閉つて居た。……午すぎからちら
／＼降り出したので、白いものはまだ然まで激しく
もなかつたが、門なみに戸の閉つて居た事は言ふま
でもない。

三尺ばかり間を置いて、つくねんと笠を傾けて立
つたまゝ、破目はあるのに、うそ／＼と覗きもしな
いのは行儀が可かつた。其の癖、おなじ處に立ちな
がら、後さきを、特に今來た一方に、――横に鳥
居が見えて神社へ入る――四辻の邊を氣にして
は見返つた状は、あとを追はるゝにしては靜過ぎ
る。……人目を忍ぶらしい様子があつ
た。……と言へば色戀の床しさがある。が、
實はさうでない。――菅笠が、こゝへ、其の辻を
來かゝると、足許から鳥が立つと言ふ諺はこの事で、
薄く敷いた雪の上を、ばさ／＼と風に鳴つて、一歩
ひく裾へ搦まるばかりに躍つたのは、何處の物置か
ら掃出したか、掃溜を犬が銜へ出したかと思ふ、筋
骨立つた、ずた／＼の漉團扇で、諺がもう一つあれ
ば、貧乏神に魔が魅したやうであつた。

追はれるやうに、躲すやうに、恚う爪立つやうに、二三度、うる／＼と成つて、ずつと出ると、風の加減か、裾へはつかず、おなじ處を、くる／＼と舞つて、骨がばさ／＼と鳴つて居た。新屋の燈は、もう其處までは届かないが、妙に、其の澁團扇の影を氣にしたのである。

で、何うも、澁團扇を氣にするやうでは、大概人品の度合も知れたと、先づこゝで言つて置く。

處で、腰障子ががた／＼と開くと、頭から眞黒で、眉の上へ嘴のやうに廂の突出た坊主合羽といふ奴に、すぼりと包まつた少年が一人、
「行つて來ます。」と威勢よく飛出すと・・・「氣をつけてね。」と、恚う帳場らしい處から、片褸おろしながら送出したのが
櫛卷の美しい其の婦で。

早いこと、少年はもう四辻の處に居て、「やあ、こん畜生。」といふのを、姉か、其の婦が、「惡戯をしては不可ませんよ。」と一寸寒さうに袖口を折込むのに、薄紅がちらりとして、戸口から其方

を覗いた。

犬も、猫も、何にも居ない。――少年は、捨團扇の化けさうなのにかからかつたものと見える。

片暗へ身を引いて居た若い男が、其處へ、さ々と雪の音、斑に白い菅笠を、沈めて出した。「旅のものですが、一杯頂けますか。」變な風體を、別に怪しむ様子もなかつた。或はこんなのが此の店には相應はしいのかも知れない。「はい、さあ何うぞ、お入り遊ばして。」で、帳場からすぐに二階の階子段の見える土間の一方の椅子に掛けた。婦が丁寧にお辭宜をして。――小賣に酒を取次ぐかたはら、ほんの一升、硝子杯幾つと、お間に合せをして居ました、店でさしあげますやうに心掛けましたのは、つい近頃の事で、まだ何にも間にも合ひませぬ。お盆でお給仕をしますほどの支度もありませんけれども。――結構です、結構です。――餘りお寒うございますからお爛だけはいたしませう。それでございよう遊ばすか。――結構です。結構です。

―― やがて、ほッ／＼と杯を呑むやうに、白い

息の中へ熱燗を立てつけて、さてお肴は？ . . .
・ 鯛をむしりますほかには、水菜と鮎の煮ました
のいま、あの少年にご飯を食べさせて
出しました。私どものお菜がございます
お厭でなくば。―― 至極結構です。が、旦那の分
がなくなりはしませんか―― あれ、お人の悪
いと、ぽつと瞼を紅くして、―― そんな
なものは存じませんとち一寸姿を曲つた處は、恚う
は見えても酒を賣る姐さんらしい。が、深切に、一
度鍋に掛けて、暖めなほして盆で出した小鮎と其の
水菜の煮つけ。

土間を鈎の手に廻ると、階子段の裏あたりで、や
がて、ちやぶノノと水づかひ、チヨキノノチヨキノ
ノノでものを刻む音がするのを、菅笠の男は、椅子
から遠まはしに差覗くやうにしたが、其處は暗い。
店の燈をほのかに借りた、馴れた水仕事と思ふにつ
けても、あの露出した二の腕の色の白さが俣ばれる。

目を天井へ外した、が、熟と瞳が寄つて眉が迫る
と、推伏せられたやうに俯いて、彼は何故か、ほろ

りとした。

婦をんなは襷たすきがけのまゝ、大根だいこんの淺漬あさづけを　　―　　こんな、ぶしつけなものを、お氣味きみが悪わるうございませんでし
たらめし食あがつて　　―　　これは何なにより結構けつこうです。と
箸はしをつけると、此この邊へんの仕來しきたりで、分厚ぶあつに切きつた薄うす
皮かはを一寸ちよつと残のこして、縦横たてよこに淺く庖丁目はうちやうめを入いれたのが、
菱形ひしがたに目めを持もつて、箸はしに掛かつて、渚なぎさに干ほした網あみのや
うにさらりと上あがる、うつくしい人ひとの袖口そでぐちの影かげに、白しろ
魚うをがこぼれさうである。

切きるのも惜をしい。　　―　　お手際てきはですねと、箸はしを置あい
てい失禮しつれいですが、一つお酌しやくが願ねがはれますまいか。
えゝ、こんなもので。　　・　　・　　・　　・　　飛とんでもない。不ふ
調法うはふですけどゝ、襷たすきをはづして銚子てうしを取とつた。　　―　　
お店みせは新あたらしから。はい、あの。　　―　　

―　　火ひの用心ようじん、火ひの用心ようじん　　―　　火ひの用心ようじん　　―　　
あゝ、珍めづしい。　　・　　・　　・　　・　　今夜こんやは節分せつぶん、おん厄やくは

らひませうな厄落し、厄拂のかはりに、雪の町に火の用心を觸れるかと思ふ聲が、三つ續けに聞えると、お辻　――　やがて名も知れて居た　――　お辻はぞつとしたやうに、胸を伏せた。

――　火の用心、火の用心　――

のぶとい皺枯聲が、すぐ戸口で。いきなり腰障子を開けると、耄碌頭巾に、網代笠を頂いたのが、雪の中から小鼻と大疣をぬいと覗かす。同時に消えたか、消して来たか、灯のない件の提灯に、あかざの太杖を持添へて、片手にはさ／＼の澁團扇　――　此は誰が目にも、四辻を飛び廻つた其と知れる　――　を被布の袖下りに握つたが、掬くふやうに煽つて、風音を立て、

「火の用心、火の用心。　・　・　・　用心せい、用心せい。」

「あれえ。」

けたゝましいほどに、お辻が遮つて、

「可厭ですよ。阿闍梨様。」

「まあ、可えがな、可えがいな。」

「可厭ですな、不可ませんわ。」

「何、」

と、聲に尻角を立て、

「入つては不可んと言ふかい、飲んでは不可んと言ふかい、飲ませんと言ふかい。」

と言ひ、既にづしりと腰を掛けた、これは店口正面の一脚であつた。

「そんな、あなた、……お酒の事ではないのです、その團扇なんですよ。」

「お、うちはが何うしたかい。」
と忽ち生ぬるい聲をする。

あの、今夜は節分ですし、
厄落しにと

思つて、それを先刻うつちやつたのですのにさ

「はあ……いかに、厄落し。——中に

も、火の厄、火難を落さうとしたのぢやらうがな。」

「え、此間から、あなたが幾度もお話しなさいます、もと、この家の、節分の晩には、いつも火に祟るとおつしやるのが氣に掛つて成りませんので

すものね。」

餘所見をして居た若い男は、お辻の此の言葉に、
衝とみひらいた目を注いだ。

「姐ま　　こゝの家は、　　その、こゝの
家はぢや、　　人によつては、ほつかりと爛
をして飲ませると見えるぢやな。」

と、注いで出した硝子杯の冷酒を、
皺手で撓めて
じろりと視る。

「いや可い／＼、　　神棚、佛壇に爛をし
た酒は供へぬ。尋常のものとは違ふぞよ。へゝん。」
と若い客を流眄に掛けつゝ、

「お神酒は冷くて大事ない。ぢやが、此の節分は
大事ぢやぞ。お身は此の店で三代に成るが、はじめ
の家では、三年續けて節分の夜と言ふと火沙汰があ
つた。なれどもな、一家信心が深かつたに因つて、
懸命に守り通して、何うやら自火は出さず、焚けず
に濟んで。　　四年目が、あの大火事ぢや。その

時、貰火で焚けたわい。とに角火の難はよう免れな
んだぞ。何うぢや可恐しかる。―― 四五年空地に
成つて居つて、いまのこの家をやう／＼建てたが、
其の初代の主人は立春を待たずに亡くなつた。・
・ ・ ・ 一家は他國へ離散した。・ ・ ・ ・ 澤山の家
族でもなかつたなれど、さて、行方は分らぬ。二代
目はこゝに二年住んだ。その間、一度節分に別條が
あつたか、ないか、それは、ありやうは私も知らぬ。
ぢやがの、落着いて住みおほせぬ處を見ると、餘り
安泰ではなかつたぢやろぞよ。あとが此方ぢや ―
はじめでの節分ぢや。―― また丁度旅を掛けて、
この節分のあとさきに、こゝに男手のないと言ふも
氣掛りぢや。―― なあ、姐ま。」
と、肩に陰氣な蔭のさす、お辻の不安らしい顔を
見て、酒を吸ひざまに、唇をぺろりとやり、
「眞に一期の大事ぢやぞ。手過失があつてはな、
わが家を焚いただけでは濟まぬが。・ ・ ・ ・ 火元
は七代まで崇られると言つてな、・ ・ ・ ・ 煙草火
一つ。・ ・ ・ ・ 吸殻に風ばう／＼。」

若い客は、思はず契みさした巻煙草の火を隠して、

下へ伏せた。

お辻は見るともなしに、氣の毒らしい、遺瀨のな
い顔をする。

阿闍梨親仁は、肩で押かゝる如く、嵩に乗つて、

「……または蠟燭一挺の怪我がから、家も町
も一舐めに灰にすると、可いか。――今は此の火
あぶりのお仕置もなけれども、世の難儀、人の迷惑、
人の怨恨で。……此の邊では火元と言へば、
その主人は先づ焼死んで言譯をするのが掟のやうぢ
や。あ、あ、可恐い事ぢやな、火の用心が肝心ぢや
ぞ。……用心せい、用心せい。」

「えゝえ、それですから阿闍梨様。……些

との事でも氣に成りますから、」

お辻はわく／＼して、四邊を視ながら、

「その團扇を棄てたんですの。」

「ふーむ。」

「あなた、昨夜も入らした時。」

猫の

怨のお話をなさいましたでせう。――あの、大きい

なお邸で、氣の荒いお殿様が、盜賊猫の堀の上へ遁
げる處を、槍玉とかにおあげなさると、串刺のやう
に成つて、ぐる／＼と尾と耳で廻つたんだつて、ま
あ、酷い。
三年目の猫の日には、吃とお
邸が焼けるツて、未來も見徹しの豪い法印さんが心
着けなすつたのでしたつてね。」

「私がお堂の先々代ぢや。髭は長し、鼻は隆し、
眼は光つて、活きながらの天狗、魔ものと呼ばれた
お山伏ぢや。」

「お邸にも、氣になる事が續いた處だつたんださ
うでございますものですから。」

若い客の徒然を慰め顔に、こんな中にも氣あつか
ひの口を分けて、何を微笑むともなしに莞爾した、
眞珠のやうな皓齒である。

「あの、其の日は、空家のやうに諸道具を片づけ
て、朝のうちから、火の氣といつては、附木も置き
ませんで、あの、お佛壇の燈心さへ片づけて、番人
のお侍ばかり、邸中を水にして冷く成つて居ました
のに——眞夜中でございますツてね・・・」

何十疊とかの、あの書院の眞中に居たお侍が、何うしても我慢が出来ませんで、内證の内證で、そつと火打石で火をきつて、それを火奴に移したと思ふと、――高い、廣い、暗い天井の眞中から、元結ほどの、白い、細い、紙のやうなものが、スーツと下つて来て、チラリとほくちの火をうつして、あれ／＼、それが天井へ上つたと思ひますと、一時に板の合せめから火を噴いて、それが猫又火事と言ふ、大火事になつたつて――お話しなすつたんでございませぬもの。」

「其の通りぢや」

阿闍梨は小卓を八々と敲いた。

「もう私」

煤が落ちてもびく／＼して

居ますのに――今日お午過ぎころ、こゝの屋根の上で、猫の鳴聲がしますから、ハツと思ふと、あの。」

「袖口がちらりとして、」

「破風の窓に、何うして挟つたんですか、内ぢや見馴れませんか……その澁團扇が挟まつて居たんですもの。――可厭でございませぬわねえ。――」

お邸の書院では元結ですけど、こんな家ですから
破れ團扇なんですよ。――夜だったら何うしま
せう。――書間で、それに少年でも、あの子が居
たもんですから、……。畜生々々、……。猫
が悪戯に銜へて来たんだと思ひますから……。・
然う言つて、追ひますうちに、雪風が、ざあと向う
の山の方から通りますと、空が暗くなりましてね、
山から落ちるやうに、破風をくゞつて、井戸のつい
わきへ落ちたんですよ。――この上、貧乏に
しましても、火事にしましても、可厭で、忌はしう
ございますから、人顔の見えなく成るのを待つて、
あの四角へ、厄落しに捨てましたのに……。・阿
闍梨様、あなた、また拾つてお持ちに成るんですも
の。……。何うしませうね、氣に成りますわ。」

「たはけた事を。これ、私を誰ぢやと思ふ。玄性
院の岩膜ぢや。女子などの料簡で察度をせまい、――
これ、假にもな、その火の氣掛りのあるものを、
町の辻へ投出して可いものか。――火を出す
わ……。・な、それ、内から火を出す……。・
事になるわい。」

「えゝ。」

「うむ、何うぢや。．．．あの四辻の雪あかりに此の澁團扇のめら／＼と動く體は、炎を噴くも同然ぢや。通りがりに見たればこそ、私が掌の内
にちやと納めて來た。――これとてもぢや、凡人
が虚氣に握れば、立處に火傷もしかねぬ。火を出す
と、納めるとは、大海と蜆貝の相違に成るぞよ。――
心あるものはな、煙草の火でも、．．．火を
出すといふによつてな。」

若い客は舌打して、巻蓑を火皿に伏せた。

「いやさ、火をつけたまゝで、それ門を跨いでは
出ぬものぢや。――さあ、もう一杯。――私な
ればこそ、此魔の魅した破團扇を、干鱈同然に扱ふ
が。
と、がぶりと飲みさした硝子杯を、その澁團扇の
上にのせた。――その時までは、椅子なる膝頭に
突立てて居たのである。」

「はや、此でさへ爛をしたほどに、ふゝん、酒さ

へも暖もるぞ。團扇の火氣が擧るわい。― それ
で何かな、猫が鳴いて、この團扇が覗いたか、破風
をな。―

と白眼に、隙間だらけの天井裏をどろりと睨んで、
「破風を團扇が覗いたか。・・・びら／＼と
落ちたぢやな。― あゝ、それが、同じくば井戸
の中へ落ちむと可かつたになあ。さてこそぢや、火
の用心、今夜が大事ぢや。やれ、又雪を誘うて、ざ
つ／＼と凄まじう雪が降るわ。」

町内前後を、人らしいものゝ通る氣勢もない。

「心細うございますこと。― 氣味の惡
い・・・何うしたら可いでせう。こんなでした
ら、あの子ども、出さないで置けば可うございまし
たのにねえ、私・・・節分の豆に、お菓子も蜜
柑も交るし、あとで、お年越の歌留多をするつて、
賑かなうちへ呼ばれたんですもの。・・・可哀
相に、さみしがつて居ますから。・・・私だけ
で、心細いのを堪へたんですけれど。・・・遠方
ですから、遅くなつたら泊らなければ可うござん

す・・・・雪もだん／＼積りますし。」

と半ば呟いた繰言も、伏目の眉に消えて行く。

「あね、あね、あね、あね、あね。」

「はい、はい。」

遠道の雪一條、黒く點々と辿る坊主合羽の少年を、
心で追った魂を、忽ち呼返されたやうに返事をした。

「いや、さながら、かわい女、お身一人

で・・・孤家の籠城をする體ぢや。雪は白いが、
魔の火も人間の目には白いぞ。千萬の火矢を射かけ
て降るなあ。――あね、あね、尋常ごとではないぞよ。

此は。」

「あじやりさま、あじやりさま。」

お辻は、崩折れるやうに、黒疣に向合つた一脚の
椅子に身を落した。

「何うしたらいゝでせう。」

「早急な手段はな、私の、恚う見る前で、帯を解
いて、しめた紐まで除つて見せるのぢや。な、凡俗

にさへ恥かしいものを、此の阿闍梨の眼に曝す。此が速に、悪業の一端を滅して、幾らか火難を逃るゝ方法ぢやよ。うむ、何うぢや、その腰のきれを。」

「可厭、あなた。」

颯とあかくなつて、引肩に身をくねるのを、手首を握つて、ぐいと留めて、

「なあ姐ま、家を焚けばとて、身を火あぶりになればとて、それが出来ぬか。——若い女ぢ

や。……あゝ、不便な。うむ、……待て待て、さし迫つた手相を見て進ぜよう、——おゝ、これは。」

「阿闍梨様放して、よ。」

「いや、不束な易者は、人間の皮を見る。眞の手相はな、確と肉を徹して血を見るのぢやよ。——
……これは、じわり／＼と、沈んで亂れた脈を打つ——お辻姉、お辻姉。……お身が膚は清らかであつて、それで、はや、つる／＼と膏があるなう。汗か、雪のやうな汗ぢや、おゝ、これか

乳か、いや觸りはせぬわい。が、急所ぢやぞよ。女人の相はこゝにある。この血の脈の打ちやう一つで、火と水が分るゝのぢや。――あゝ、やれ／＼、氣の毒ぢやが、何うもこれは危いぞよ。」

襟が青く頬に映つて、血のやうな襦袢の胸。

「阿闍梨様、――堪忍して。」

「いや、私は知らぬ。――魔がなす惡火ぢや。」

「――節分の今夜、五間、間數あればその數五つ、七間に七つ、廁の中にまで、土器に燈火を點じて、火を防ぐ法もある。――燈心、油の類はあるか。」

「えゝ、あきなひますから、少しづゝはありますけれど、一つだつて可恐いんですもの、人の居ません、二階へなんか、こんな氣味の悪い晩に、何うして裸火が置かれませう。」

「言ふほどもない事ぢや。――こゝの初代は、九つの間があつた。――その間ごとの火を、九つ、たつた三人で、それ、節分の夜と言ふと火沙汰のあ

る可^{おそろし}恐^{よなか}い夜^{まも}中に守^{まも}つたとな。それでこそ、せめて火^{ひも}
元^とは免^{まぬか}れた。ぢやが、其^その心^{こころ}苦^{くる}しさを思^{おも}へ。――
いま此^{こゝ}處^ゝでは、私^{わし}が居^あて守^{まも}つて進^{しん}ぜる、可^ええか、こゝ
へ泊^{とま}つてな、私^{わし}が泊^{とま}れば火^ひは防^{ふせ}げるぞ。可^ええか、う
む、可^ええか、可^ええな。――

「あれ。――」

「それ、こゝに打^うつ、しとりノゝと水^{みづ}のしたゝる
やうな、此^{これ}が、此^{これ}が却^{かへ}つて火^ひの脈^{みやく}ぢやぞよ。火^{くわ}難^{なん}の
兆^{あざ}ぢや。――」

「姐^{ねえ}さん、水^{みづ}を一^{ばい}杯^{ぱい}。――」

「―― 此^この時^{とき}であつた、若^{わか}い客^{きやく}がきつぱりと聲^{こゑ}を
掛^かけた。――」

迷へる信仰に、弱き女の、身自ら落つるとは言へ、
 囿にかゝつて烏糲に翼を搔いたお辻の、ハツと似而
 非阿闍梨を離れたのは、ツと其の糲を切つて、小鳥
 が土間を飛んだやうに見えたのである。

「井戸からすぐに、茶碗で——と誂へた。
 車井戸で。」

凄じい吹雪の夜に、キリノ、キリ、ギイと手繰ら
 るゝ釣瓶の音は、手とゝもに白き魂の、水を傳ふば
 かり、階子段の裏の暗がりが高く響いた。

熟と聞き澄して、肱を垂れつゝ、指で音譜を強く
 が如く、釣瓶の音に和した若い男の手は、井戸の探
 さと水に届く緒の距離を、獨り測りつゝあるものゝ
 如くに見えた。

「あゝ、結構——此方へ。……いや、
 飲むのではありません。先刻から、聞くとおなしに
 何となく聞きました。今夜の火沙汰を此水で占つて
 上げようと思ふんです。」

「まあ、」

「あゝ、汲みたての水は、何しろ潔い。」

と、カタリと靜に椅子を寄せた。外に降り亂るゝ雪を、影に曳くやうに見えて、若き其の風采も、清かに爽かに、卓子の茶碗に、一掬の冷水に對したのである。

岩膜阿闍梨は、臺つきの硝子杯を握りながら、中に腰に浮いて覗いた、威容を整ふるがためか、片手に澁團扇を忘れない。

「姐さん、いや、お嬢さん。」

「あの、旦那様、」

と、口籠りながら、また臉を染めたが、

「私は、あの、旅をして居ります留守の人の、なんなのでございますわ。」と肩で消れる。

若い男の屹とした態度は、客ゆゑに繕ふ娘らしい色を許さなくなつたのである。

「井戸は淺く成りましたね。――水は殖えましてね、それが可いのです。それがために、底を汲ん

でも暖あたかくありません、――水の冷つめたいのは火ひのた
めにはいゝ事ことです。――火くわじ事の憂うれひはありません。」「
「まあ、貴方あなた。」「

と、ほつと吐ついた息いきが、胸むねを乳ちの下したまで通とほつて、
卓子テーブルの端はしに柔やはらかに手てをつくと、お辻つじは嬉うれしさにほろり
として、そのまゝ、袖口そでぐちを目めに當あてた。雪ゆきを籠こめた
燈ともしびに、櫻さくらが薄うすく咲さいた風情ふぜいである。

突ついて覗のぞいて、かいだ鼻はなを、仰あをむ向けに椅子いすに引ひ
て、被布ひふの腹はらで反そつたる阿闍梨あじやりが、

「はゝん、お身みは、水みづの八卦けおき置おか。」「

「いや、易者えきしやでも何なんでもありません。が、清きよい心こころ
で、澄すんだ水みづを見みれば、過くわこ去こも未みらい來こもよく分わかるので
す。」「

「はん、未みらい來こも過くわこ去こも映うつすと言いふかい。」「

「火ひの消きえた處ところはあつても、水みづのない世せ界かいはあり
ません。火ひを見みるよりも明あきらかだと言いふのは、水みづに映うつ
影かげなんです。」「

「申まをすものぢやな、……言いふものぢやな
あ。……後のちの事ことは先まづおけい。――崇たる火ひ

を三年免れて、四年目に此家の焚けた、どだい、その業の火のいはれだけでも分るかな。――それが分らないでは、今夜の大事、無事など、口幅たく饒舌れまいぞ。――分るまい。――姐ま、ぢやによつて言はぬ事ではないのぢや。その可恐い火はな、可えか、――これ、此の澁團扇で煽出でたものぢやぞよ。」

と腕を張つて、――若い人にすり寄つたお辻の帯のあたりを、ばさりと煽いだ。可厭な風である。

「其の團扇が、何と、然も今日、猫の聲の前じらせで、破風口から飛込んだわ。可恐しい。――これ私に縫らいで、心に背くと、たゞでは濟まんぞよ。年越の今夜は過ごせんぞ。」

と、ぶは／＼と又煽いだ。
お辻はその毎に、ぞツ／＼と、なよやかな身をすくめる。

「大丈夫。――そんなものは氣にしないで、この茶碗の水をよく御覽なさい。」
彼は端正と膝を直した。

「こゝに・・・小さく、澁團扇が一つ水の中に見えませう。見えますね。爺さんが一人居て、それが、團扇を手に持つて居るでせう。白髪の爺さんは、青い蜘蛛のやうな顔をして、その白髪が逆に立つて一方を睨んで居ませう。そして蹈臺に、しゃツきりと腰を掛けて居るでせう、――見えますか。・・・見えますね。――居まはりに、山のやうに、燃草、鉋屑が積んであります。」

阿閣梨は顛割額の鼻の根に、うすい眉毛をびく／＼と顰めて寄せた。

「――この爺さんは、獨身ものゝ、指物屋です。狭い町の眞向うに、一軒八百屋があつて不斷、火をするやうに快からぬ中で居ながら、止むを得ない事情から、家を抵當に、其の八百屋に借金をしたのです。――金の始末がつかないで、いよ／＼家を取られて、住居を追出されると言ふ前の晩、――それが除夜でした・・・今夜です。夜中、一時頃に、我が家へ火をつけて、背戸へ出て、炎の中で、賣りものゝ蹈臺を床几にして、破れた澁團扇で

眞向うの、その八百屋に向つて、煽ぎたて／＼つゝ
焚死んだんです。が、御覽なさい、灰汁のやうな煙
を巻いて、血の炎の流れる中に、胡麻のやうに、バ
ラ／＼と黒く轉がるものがあります。八百屋の亭
主と、女房と、婆さんの三人が、煽ぐ火の爺よりは
さきへ煙にまかれて死んだんです。――茶碗の眞
白な處は今夜のやうな矢張り雪だつたんです。こゝ
に坂があります。下を小川が流れて、榎の太木があ
つて、空と離れて高い處に塔のやうなものゝ見える
のは――今はありませんが、此のお店の三軒さ
きにあつた三階の屋根です。榎が動いて居ます
ね、――炎を嫌つて、梢を振つて。――この樹
は焼けないで、こゝへ飛んで、三階の棟へ思ひも掛
けず飛火がして、其の時此の家が焚けたんです。――
それ、團扇が見えますね。」

むず／＼と、二人の中へ割込みさうに近寄つた、
阿闍梨の手を見ながら言つた。

「爺さんは煽いで居ますね。――あなた、しか
し御安心をなさい、――この澁團扇は、斷じてあ
なたの身に觸るのではありません。」

「顔を、顔を。」

と、岩膜阿闍梨は、喘いで、忙いで、

「顔を見せてくれい。」

「あ、見たまへ。」

「うむ、生白い。．．．．怨念の爺の話は、

わづかばかりの人のほか、誰も知らぬ筈と思つた

が。――うむ、幼顔えがある。．．．．お身は、

此家の先代、焼出されの、表具屋の忤ぢやな。」

「何うしました、羅苧屋さん。――然う言ふ此

方も障子張りだがね。」

と言つた。

小八と言つて、この阿闍梨は、おなじ町内で、以

前やすものゝ煙管を張るのを職とした、邪教に凝つ

た親仁であつた。

「澤山ぬかせ。――表具屋の忤が學士に化けて、

近頃此地の學校へ雇はれて來せをると、人の風説に

聞いたが、睫毛に集つた蟲は見えぬ。――ようこ

そ鼻のさきへ面を出いで、羅苧屋ぢやと吐した

な。――これ、おのれの父親とは、もと／＼から
宗旨での敵同士ぢや。羅苧屋でも仔細ない、お身が
小學者に成る年數には、わいも山々、峰々の行を積
んだぞ。――立去れ。町内の火伏の妨げぢや。そ
の上に私がめす、食ものゝ邪魔をすると、爲めに成
らぬ。これ、この女はな、わいが、この別嬪の母親
からして、母娘二代に執着を掛けたお供物ぢや。早
や筋も骨も萎いて、今夜にせまつて血肉を啖はうと
思ふ處に、奇怪な蚊とんぼが舞込んだ。――立去
れい。」

客は居直つて屹と見た。

渠は工學士、立川淳吉である。

「其の面構では失せ居るまいな。……よい
／＼、姐まも、よう覚えて居れ。お辻。――
芽生の學問如きで脈は分らぬ。人間の執着の行力
を見せてくれう。覚えて居れ。たゞは置かぬぞ。」

「何をする。」

八々と擲つた提灯を、八ツと横に顔をかはすと、
續け状に、網代笠を取る手も見せず、お辻の横顔に

たゞきつけた。笠は外れて帳場へ飛んで、一呼吸さ
きに、お辻は淳吉の足に縋るやうに、うつむけに椅
子に踞つた。おくれ毛は白い頸に震へて居る。

「ふん、ふん、ふうん。」

黒疣を弾くが如く、ふか／＼と、ふやけた鼻を鳴
し／＼、團扇を片手に、杖を取つて戸に向いた、行
者の袴は、さながら土間に獣の尾を曳く如く、吹込
む雪が土間に吹敷く。

四

「まだ居ますわ、居ますんですよ。．．．．あ
なた、何うしたら可いでせう。」

密と際見をした表二階の白く成つた肱掛窓から、
寒さと不気味さに、お辻は肩をわな／＼と、奥　　―

と言ふ程もない、裏へ向いた　　―　六疊ばかり、
炬燵の傍へ、爪立つやうにして引返した。

薄暗い電燈に、衣服の色もあせて、細い羽織の緋
さへ雪にまみれたやうである。

「だん／＼何うも人間業ではなくなりましたよ。」

「えゝ。」
と彌が上に引合せる、前褌、膝もがく／＼して、
お辻は見るにもいぢらしい。

「然うかと言つて、決して鬼だの、魔だのゝする
事だなぞと思つては不可ません。―　　獸の所業で

すよ。」
と淳吉は、其の炬燵に嚙りつくやうにしながら言
つた。が、言ふものゝ、既にこの炬燵には火を入れ
ない。實は火のない燼燵なのである。火どころか、

傍に火鉢もない。二階も下階も、凡そ家中に、火の
氣と言ふものは、餘さず皆消して居るのである。寒
國の吹雪の夜に、之は宛然狂人の爲す業。

が、岩膜阿闍梨の舉動と言つたら、はじめて頷か
れようと思ふ。

あの行者は、前刻に腰障子を外に出ると同時に、
あともしめないで、ぎよろりと白眼に毒を漲らして、
見返り状に、片足をバツと舉げ、膝を掛けたが、み
しりと眞中から太杖を挫折つた。

向側なる神社の裏垣の前に、其の杖を組違へて、
さす叉形に、ふり積む雪に突さすと、むずと腰を落
して掛けて、お辻の店を眞正面に、澁團扇で、屋の
棟をこきおろすやうに上から、ねだ柱を掬ふやうに
下から、上下に煽ぎはじめたのである。

淳吉が、びつしやり腰障子を引くと、お辻はその
上へ葩の枢戸をおろしたが。

風はすさび、雪はしきつて、時ならぬ熊、鯨のあ
れとも思ふ、眞夜中に成つても、聊も其處を動か

いで、いま、煽ぎ續けて居ると思はれよ。

帳場の火鉢さへ、淳吉が指圖して、火種も残さな
いで消さした。土間に松明、篝火をも焚いて邪惡の
氣を打拂ふべき地位にある淳吉の此のたよりなさ
は。――

是非もない、節分の夜に續けて火沙汰のあつたと
言ふ、其の二度までも、實は少年の折の淳吉の粗相
で、二度とも、二階の炬燵のために過失をしたので
あつた。火伏のために、九ツの間に、九ツの燈明皿
に火を配つて、其の燈心の火を守るのに部屋々々を
廻つて、だゞ廣い臺所・・・廁までも、人づく
なの佗しい折から、四年目の節分には、少年ながら
責任を感じて、凄さと、可恐さと、心細さと、何よ
りも不氣味さに、ぼろ／＼涙を流したと言ふほどの
弱蟲であるから。

と言ふのも、今は焼けて、もう影もないが、此町々
の窓を覗く、向う山の山の端に、三本松と稱へた松
は、天狗の棲家と恐れられた。其の松の焚けたのは、
春のたけなはな深夜であつたが。折から以前の家の

此の二階に、病の床について居て、夜も寝られなかつた、淳吉の、まだうら若い母が、ぼつと障子に映る炎の影を、誰より眞先に見て、肱掛窓に手を掛けると、目前に見える山の峰の、三幹の大松明の、火花を散して燃ゆるのを見て、「あゝ、綺麗だ、綺麗だね。」と言つた。――

「火事だ。あれ、大變。」と驚けば、恐れゝば可かつたのである、――と除夜ごとの火沙汰を懸念して、淳吉の父が、鬼神に通ずると稱へられた易者に占はせた時、易者が言つた。――往昔からまゝある事、天狗の火とて眞個は燃えるのではない。不意に大なる炎を上げて、人の驚き恐るゝのを可笑がる、魔屬の徒然の惡戯である。三本松の火も、實はそれであつた。……町において最初に見たであらう淳吉の母の、「綺麗。」と言つた、思つたのが、おどすつもり魔の心に背いて、天狗は憤りをなした。腹だちまぎれに、眞に、その住家の三本松を焚いたのである、その崇だと、易者が言つた。

誰に聞いたか、占つたか、事實は其の通りであつ

た。

但し火のたよりは、母のなくなつた翌年からはじまつたので、家の焚けたのは五年目であつた。

それ／＼の記憶のあるために、今度、縣の學校に聘せられて、着任したのはわづかに昨日の事であるのに、故郷の可懐さに、そゞる町へ出ると雪に逢つた。もとの中學校がよひを思出して、故と合羽うる店で、菅笠や莫蔭の支度をした。その時、合羽屋の、臺所で、豆を煎る香いにほひに、今日の節分を知つた。

氣づかはるゝのは以前住んだ家のあたりの、火沙汰である。

いま住む人の人柄によつて、もし、言ふべくば、笑はるゝまでも迷信の注意をしようとして、實は、そのために故らに訪ねたのであるから、四辻の澁團扇の希有な形は、彼奴よりも淳吉の方が先に氣に掛けたほどなのである。

第一、美しい人の心弱さに對する、暴言に反抗ふために、水は清し、冷し、潔しと言ひは言つた。け

れども、井戸水の其實は、鐵氣よりも、むしろ薄く溝のほひを帯びて、且つ濁つて居た。

これ、家のために相して、祝すべき事ではなかつたのである。

此の心で、恚く人妻と家を守るのである。焦慮は實に察すべきであつた。

「旦那さん、何うなりませう。」

「此のくらゐ用心をすれば大丈夫です。」

「行者は死にはしますまいか。」

と、おど／＼して言ふ。

「幾人も女房を病氣にして死なせた奴です。彼奴

の死ぬのは勝手だけれど、絶間も、隙間もなく煽い

で居られるのは煩いですよ。」

「いくら其處等を閉めましても、ふう／＼風の來

ますこと。」

既に表二階と言ふのが、――焚出されて、彌が

上に不工面だつた淳吉の父が、半作事に、床を張つ

たばかりで世を辭した。――あとの二代もそれな

りで、疊はこの一間のほか今もつて敷いてない。

床板のあはせ目、すき間を、下の土間から吹き上げる風が、襖を突抜けて、みし／＼と梁が鳴る。團扇で拂はれるやうに身に應へる。芥子粒の火の粉でも、この煽に誘はれると忽ち一面の炎に成りさうで懸念に堪へない。

「天井裏で、パチ／＼音がしますが何でせう。」

「鼠。」

「あの、猫が騒ぎまして、此の四五日、ちつとも鼠は居りません。」

「漏電でもすると不可いなあ、然うだ、危い、早速お消しなさい。」

「眞暗で」

「構ひませんとも。」

「旦那さん、矢張煽いで居ませうねえ。」

「仕方がない。たゞ夜のあけるまでの辛抱です。確乎なさいよ。」

「はい、……くらがりで、冷酒ですけど、もうお一つ。」

「いや、酒は澤山、もう口に泥みました。……」

・あゝ、煙草が喫みたい。――いゝえ、私はも
の好きです。勝手に火の番をします。――先
刻からも言ふ通り、恩にも被せられませんが、恩にも
被せません。あなたが氣を揉むには決して當らない
が、煙草だけはみたいですよ。」

「後生でございますから、めしあがつて。・・・
・煙草をめしあがるくらゐは、――あなた。」

「それが不可い。嘘にしろ、火打石でさへ、天井
から白いものが。」

「あれ、可恐うございます。」

「燐寸ぢやこの風に、どんな怪我があらうも知れ
ません。」

「私、何うしたら可うございませうね。」

お辻はもう、ひつたりと寄添つて居たのである。

「お腹もおすきで在らつしやいませうし・・・
せめてお餅でも焚いてと思ひましても、それも出来
ません。火のない炬燵におあて申して。――あれ、
まあ、炬燵蒲團の上が、さら／＼しますのは、吹込
んだ雪でございますよ。――何とも、何うもまる

で地獄へお落し申したやうな。．．．私、私の
身體で出来ません事なら．．．旦那様、さつき、
あなたは香々の淺漬の網がお氣に入りました。私
の、私の身體を網の目に刻んでも、さしあげたう存
じます。」

白い膚がちら／＼と、網の目のやうに、幻の暗に
浮いて、袖の花の咲くのが見える。

「お辻さん。」
雪と雪と打つやうに、唇の觸れた音。

「いやな、お煙草。．．．お煙草ですわ．．．
お煙草ですわ。」

「あなたの綺麗なのに迷いました。．．．餘り算
盤じみるんですが、交番へ届けるのが、一番よく、
化行者を防げたのかも知れません。．．．知つ
てしなかつたのではない、それさへ氣のつかないほ
どに、私は迷つたんです。お辻さん、あなたが、そ
の窓を覗いたやうに、毎日、二階から憧憬れて居な
がらも、わけあつて其の人の死に、身投げに行く
のを、雪の降る晩、．．．十六七の少年ですから何

うする事も出来なかつた。その時の娘さんに、あなたはそのつくりなんです。――（今晚は。）（はい。）（は）と言つて、その窓の、上と・・・下で、それが別れで
と言つて聲もせまつた。

しばらくすると、樞は水に浮くやうに静に浮いて、腰障子が盗むやうに開いた。淳吉と、お辻の姿は、ふしまるんで戸口へ出た。いや、並んで立つて出たが、横吹の雪に吹廻されたゝめに、然う見えたのである。

二人は、家も、身も守るに堪へなかつた。且つ恚うするのが、のろひの澁團扇を防ぐに、最上の架であることに気づいたからである。嫉ましいものゝない空家をば煽ぐまい。何故早く心が着かなかつたであらう。

行者の軀は、堆く成つて、眞白な瓦焼の竈が、口から火を吹くやうに澁團扇が渦に動いて居た。

颯と通抜けたが、しかし、同じ所を同じやうに、

煽ぐのが留まなかつたのである。

大きな榎で坂が知れる。――二人が吹雪の峠を越したやうに、一坂、下町へ下りた時、どツツと風が空へ、火の手が上つた。

恰も酒店の家の眞上である。雪に籠つて擴がる火は、櫻が霞んだやうである。

お辻は打たれたほどに、腰を落した。炎の影は、紅に膝にこぼれて、裊が雪を染めて美しい。

吹取られた笠を手に取つて、女を庇つた淳吉の姿は、ちぎれる様に白かつた。

失火の原因はわからない。

心中をしたとか。行方が知れないとか聞く。――

二人は若かつた。故郷の濕地の老蝦蟆が、冬眠れ

ばとて、凍死などするものか。……枢をおろしたあとの或時間を経てからは、垣長く結んだ破團扇ばかりが、窓に吹雪に荒れ狂つて居たのであつた。

【完】